

人称代名詞「on」による表現から見た 『タルチュフ』のエルミールの存在について

日比野 雅彦

〈キーワード〉

①モリエール ②フランス古典喜劇 ③『タルチュフ』 ④人称代名詞「on」

〈論文要旨〉

モリエールの作品に限らず、17世紀フランス演劇において女性の役割はあまり大きくない。モリエールの作品では『女房学校』のアニェス、『人間嫌い』のセリメーヌがいるが、筋の展開には大きな役割を果たしていない。しかし、『タルチュフ』のエルミールは、劇全体としては表に出ることはないが、自身が偽善者タルチュフのおとりになり、主人公の偽善を暴き出す。この場面での彼女の台詞にはフランス語に特徴的な人称代名詞「on」の使い方に極めて工夫がある。場面の展開とともに「on」の示す人称が変化を示し、また、台詞の中に1人称の人称代名詞が加わることによって劇構造に大きな変化が示されて行く。

About the use of the personal pronoun “on” in the lines of Elmire in the *Tartuffe* of Moliere

Masahiko HIBINO

〈Key words〉

① Molière ② French theater of 17th century ③ Le Tartuffe ④ The personal pronoun “on”

〈Abstract〉

The theater of Moliere has few feminine characters who assume an important role in the piece. *Le Tartuffe*, one of the most famous piece, has Elmire, wife of Orgon, Mariane, his daughter, Mme Pernelle, his mother, and Dorine, his servant. Elmire represent a sympathic house wife at a glance, but in the fifth scene of forth acte, she has a dynamic role revealing the imposture of Tartuffe in using the personal pronoun “on” representing not only the indefinite third person, but also the second person and the first person. We analyze her lines in this scene and reveal how she use different significations in these lines. The frequent use of “on” instead of “I”, “we”, “you”, and “they”, produce the distance between Elmire and Tartuffe, and it attribute comical effects to the stage. Elmire is a secondary character at first glance, but, in fact, she has a very important function in the piece.

人称代名詞「on」による表現から見た『タルチュフ』のエルミールの存在について

日比野雅彦

アリアーヌ・ムヌーシュキン Ariane Mnouchekine の映画『モリエール』*Molière* (1978) では母親に甘えるモリエールの姿が象徴的に描き出されている。映像では、病気の母親に十分な治療をせず、当時の一般的な治療法の瀉血をし、患者の家で供されるご馳走を貪り食う医者たちの姿がグロテスクに描かれている。モリエールの母親は36歳の若さで亡くなった。病名は不明である。その時のトラウマからかモリエールは医学に不信感をもち、舞台では何度も医者滑稽な人物として描き出している。その一方で、モリエールの作品に母親が登場することはほとんどない。もともと古代ローマの時代から喜劇では男性が主人公となることが多く、女性の役は限られている。主人公の恋人役か下女が中心である。モリエールの場合もその傾向は変わらない。活躍する女性のほとんども主役ではない。女性が重要な役割を演ずる作品としては『女房学校』*L'École des femmes* (1661) と『ミザントロップ』*Le Misanthrope* (1666) がある。前者では、主人公アルノルフ Arnolphe が、大人になったら女房にしようとして幼い時から育ててきたアニェス Agnès、後者では、主人公アルセスト Alceste の恋焦がれる女性セリメヌ Célimène、二人はともに主人公に関わる重要な人物として描かれている。しかしながら、二人は母親ではない。母親としての役割を担う登場人物は比較的少ない。これはもともと、イタリア喜劇の伝統でもあり、特別変わったことではないとも言える。

ところが、『タルチュフ』*Le Tartuffe ou l'Imposteur* (1664)¹ では、妻であり母でもある女性の存在感が大きい。この作品は、主人公オルゴン Orgon とタルチュフ Tartuffe の関係が軸となって話は展開していくのだが、この作品の中でオルゴンの妻で、マリアンヌ Marianne の母であるエルミール Elmire が劇の中でしめる役割はかなり高い。そこで、この論文ではエルミールの存在に注目し、彼女が劇構造の中で果たす役割について考えていきたい。

『タルチュフ』のあらすじを簡単に記しておこう。オルゴン家の居候タルチュフは、主人オルゴンの大のお気に入り、ところが彼は主人の奥方エルミールに気がある。オルゴンはタルチュフを娘の婿にむかえようとするが、家族は大反対。タルチュフは信心深い様子をしているが実は腹黒い悪者であることに主人は気がつかない。タルチュフのことで頭がいっぱいの主人に居候の正体を暴こうと妻のエルミールが作戦を立て、タルチュフは追いつめられる。ところが、彼は偽善者の正体をあらわし、オルゴン一家を破滅へと導こうとする。最後には

1 『タルチュフ』の初演は1664年だが、その後すぐに上演禁止となり、1667年と1669年にあらためて上演されている。今日全集本などに掲載されているのは1669年版である。初演

では全3幕とされている。現在は全5幕である。初演がどのようなものであったのかはいまだに不明である。

国王の介入によりタルチュフは逮捕され、オルゴン一家に平和がもどる。

この作品の第1幕冒頭はオルゴンの母親ペルネル夫人が支配する。喜劇は、多くの場合、第一幕冒頭での人物描写がその後の展開にとって重要なものとなる。『タルチュフ』は主人公のタルチュフが第3幕まで姿を見せないという面白い構造をもっているが、そのため、冒頭の場面での不在の人物についての人物描写は特に重要である。ここでは、ペルネル夫人が、舞台にいる人物を含めさまざまな人物を描き出す。冒頭、家を出て行こうとする義理の母親に対してエルミールは次のように発言する。

ここでのエルミールの台詞に注目してみよう。フランス語の原文では以下のようになっている。

Madame Pernelle :	Allons, Filipote, allons, que d' eux je me délivre.	1
Elmire :	Vous marchez d'un tel pas qu'on a peine à vous suivre.	
Madame Pernelle :	Laissez ma Bru, laissez, ne venez pas plus loin ; Ce sont toutes façons dont je n'ai pas besoin.	
Elmire :	De ce que l'on vous doit envers vous on s'acquitte. Mais, ma Mère, d'où vient que vous sortez si vite ? ²	5
ペルネル夫人	さあ、おいで、フリポットや、こんな連中のところからは、さっさと出て行きましょ う。	
エルミール	あんまりおみあしが早いんで、ついて行けませんわ。	
ペルネル夫人	ほっといてくださいな、お嫁さんや。これ以上ついて来なくても結構。 よけいなおせっかいは、やめてもらいましょう。	
エルミール	するだけのことはしなくっちゃなりませんわ。 でも、お母さま、なぜそんなにいそいで出ていらっしゃるんで？ ³	

下女を連れてそそくさと出て行こうとするペルネル夫人をエルミールが引き止める場面だが、ここでは義母の年齢の割に素早い動きが観客を驚かせる。同時に、エルミール以下、多くの人物との会話の中で義母とオルゴンの二人だけが居候であるタルチュフを高く評価していることが知らされる。また、この場面で義母の風変わりな性格が浮き彫りにされる。喜劇では、登場人物それぞれに対する観客の判断基準をどのように構成するかが重要なポイントとなる⁴。エルミールは登場人物の中で、喜劇に必要な座標軸となる存在の一人である。翻訳文では気がつきにくいことだが、ここでのエルミールの台詞には「on」という主語人称代名詞が使われている。この代名詞はフランス語に固有のもので、非常に便利な代名詞でよく耳にするものである。しかし、その意味するものはかなり広い。この作品の台詞をみてい

2 『タルチュフ』からの引用は Gerges Forestier によるプレイアード版全集のものを使用した。最初に刊行されたテキストの表記に従っているため、現在流布している刊本と句読点や名詞の大文字などの点で違いがある。この点については、プレイアード版全集第1巻 Note sur la présente édition (pp. CVII-CXXXVI) に詳しく記載されている。なお、引用にあたっては、エルミールの台詞部分のみ、主語として使われた「on」と「je」をそれぞれわかるように、前者は語に下線を、後者は語を□で囲み、視覚的にわかりやすくした。以下の引用文

でも同じ形式を使って区別している。

3 『タルチュフ』の日本語訳は中央公論社版全集のものを使用した。

4 喜劇では笑いを生じさせるため、観客に判断基準となる人物を主人公と対峙させることが多い。『女房学校』ではアルノルフとクリザール、『ミザントロップ』ではアルセストとフィラントなど。ジョルジュ・ブーレ『人間の時間の研究』「第4章 モリエール」参照。

くと、エルミールのセリフの中に「on」が多く使われている。そこで、彼女の台詞の中での「on」の使われ方から彼女の作品の中での役割を見ていこう。

まず、フランス語の「on」について確認しておこう。フランス語には主語としてしか使われない代名詞の「on」がある。この語はラテン語の homo を語源としてもつ。ラテン語には名詞に格変化がある。homo はラテン語では主格であり、対格は hominis となる。この対格の形から現在のフランス語 homme へと変化する。一般的にラテン語の名詞がフランス語になる場合、もっともよく使われる対格の形が残り、主格の形が残ることはほとんどない。しかし、on はこの homo の主格の形が残っている稀な例である。ラテン語の homo は「人間」、「男」という意味であるからフランス語の homme が「人間」、「男」という意味になる。この語は古フランス語で主語として使われることが多かったのか、homo から音韻変化を起こして on となり、それが現在まで使われることになった。当然、意味としては「人間」であり「男」という意味もあったのだが、現在では「(不特定の)人」であり、そこから転じて漠然とした「私たち」という意味でも使われている。17世紀のフランス語は今とは異なっているが、この「on」については大きな差はない。旺文社の『プチ・ロワイヤル仏和辞典』では次のように語義が書かれている。

A 不特定の人を指す

①人は、人々は homme [類語]

- a) 一般的なことを表す文や諺・揭示などで用い、人間一般を指す。用例 On n'est jamais si malheureux qu'on croit. 人は決して自分で思うほど不幸ではない。On est tous égaux devant la loi. 人は法の前ではみんな平等である。Ici on paie en liquide. 当店では現金払いをお願いします。
- b) 場所・時代などの限定を受けた人を指す。用例 En France, on aime bien manger. フランスではみんな食べるのが好きだ。On se couchait plus tôt autrefois. 昔はみんなもっと早く寝たものだった。

②誰かが、ある人が。用例 On vous demande au téléphone. 電話ですよ。On m'a donné votre adresse. ある人にあなたの住所を教えてください。

③行為者を明示する必要がないときに。用例 On passe un vieux film japonais en ville. 街の映画館で古い日本の映画をやっている。On faisait les travaux sur l'autoroute. 高速道路では工事をしていた。

On dit que...世間では...といううわさです。

B 特定の人を指す

①私たちは nous。用例 Alors, on y va? じゃ、行こうか。Nous, on habite loin de la gare. 私たちは駅から遠いところに住んでいます。Si on prenait un coup? ちょっと一杯飲みませんか。On est le 16 juin. きょうは6月16日です。《Ici on parle anglais.》揭示「当店には英語を話す者がいます」

②私は je。用例 On n'a pas peur de toi. おまえなんか恐くないぞ。Dans cet article, on va examiner deux choses. この論文では2つの事を検討していきます。

③君(たち)は, あなた(方)は tu, vous 親しさ、軽蔑などのニュアンスを伴う。用例 A-t-on été sage? 子供に対してお利口にしたかい。Alors, on se promène? 散歩しているのかい。

④彼(ら)は, 彼女(ら)は il (s), elle (s)。用例 On ne s'est jamais séparés. 彼らはこれまでに一度も別れたことがない。

「on」は「私は」でもあり「私たちは」でもあり、「あなたは」でもあり「あなたがたは」

でもあり、「彼（女）は」でもあり、誰ともなく漠然とした不特定の「人」をあらわすこともできる。

さて、この場面での「on」はこの中のどれに相当するといえようか。2か所とも「私たち」を示すB①と考えるのが妥当だ。残念ながら日本語ではこのような表現の場合代名詞をつかわないことが多い。そのため、上の日本語訳ではこの語が特定できるような形で翻訳はされていない。

第1幕第3場では、帰ってきた主人のオルゴンに、妻エルミールの体調がおもわしくないことについて下女のドリーヌ Dorine が報告する。しかしオルゴンは、妻のことは一切気に掛けず、居候であるタルチュフのことばかり気にかける。この場面は会話の流れが分断されることによる滑稽さが前面にでた場面である、同時に、後半で筋の展開として重要な要素となる「タルチュフのオルゴンの妻エルミールへの恋心」が示される。エルミールは病み上がりだからという理由で2階の自室に戻ってしまい、舞台にはいない。

第2幕でもエルミールの出番はなく、一家の娘マリアヌとその恋人ヴァレール Valère の若者同士の痴話げんか、そして、二人の結婚を認めていた父親オルゴンが急に反対し、あろうことか、娘をタルチュフと結婚させようとしていることが描き出される。

ここまでを見る限り、この喜劇の中でのエルミールの役割は少ない。表にでることのない控えめな女性という印象だが、それほどの存在感はない。

第3幕ではタルチュフが初めて舞台に姿を見せる。第3場はタルチュフがエルミールに言い寄る場面である。少し長くなるがこの場面を以下に記す。

Tartuffe	Que le Ciel à jamais, par sa toute bonté, Et de l'âme, et du corps vous donne la santé ; Et bénisse vos jours autant que le désir Le plus humble de ceux que son amour inspire.	880
Elmire	<u>J</u> e suis fort obligée à ce souhait pieux. Mais prenons une chaise, afin d'être un peu mieux.	
Tartuffe	Comment, de votre mal, vous sentez-vous remise?	885
Elmire	Fort bien ; et cette fièvre a bientôt quitté prise.	
Tartuffe	Mes prières n'ont pas le mérite qu'il faut Pour avoir attiré cette grâce d'En haut ; Mais je n'ai fait au Ciel nulle dévotte instance Qui n'ait eu pour objet votre convalescence.	890
Elmire	Votre zèle pour moi s'est trop inquiété.	
Tartuffe	On ne peut trop chérir votre chère santé ; Et pour la rétablir, j'aurais donné la mienne.	
Elmire	C'est pousser bien avant la charité Chrétienne ; Et <u>j</u> e vous dois beaucoup, pour toutes ces bontés.	895
Tartuffe	Je fais bien moins pour vous, que vous ne méritez.	
Elmire	<u>J</u> 'ai voulu vous parler en secret, d'une affaire, Et suis bien aise, ici, qu'aucun ne nous éclaire.	
Tartuffe	J'en suis ravi de même ; et sans doute il m'est doux,	

	Madame, de me voir, seul à seul, avec vous.	900
	C'est une occasion qu'au Ciel j'ai demandée, Sans que, jusqu'à cette heure, il me l'ait accordée.	
Elmire	Pour moi, ce que je veux, c'est un mot d'entretien, Où tout votre cœur s'ouvre, et ne me cache rien.	
Tartuffe	Et je ne veux aussi pour grâce singulière, Que montrer à vos yeux mon âme tout entière ; Et vous faire serment, que les bruits que j'ai faits, Des visites qu'ici reçoivent vos attraits, Ne sont pas envers vous l'effet d'aucune haine, Mais plutôt d'un transport de zèle qui m'entraîne, Et d'un pur mouvement...	905 910
Elmire	<u>J</u> e le prends bien aussi, Et crois que mon salut vous donne ce souci.	
Tartuffe	<i>Il lui serre les bouts des doigts.</i> Oui, Madame, sans doute ; et ma ferveur est telle...	
Elmire	Ouf, vous me serrez trop.	
Tartuffe	C'est par excès de zèle. De vous faire aucun mal, je n'eus jamais dessein, Et j'aurais bien plutôt...	915
	<i>(Il lui met la main sur le genou.)</i>	
Elmire	Que fait là votre main ?	
Tartuffe	Je tâte votre habit, l'étoffe en est moelleuse.	
Elmire	Ah ! de grâce, laissez, je suis fort chatouilleuse. <i>(Elle recule sa chaise, et Tartuffe rapproche la sienne.)</i>	
Tartuffe	Mon Dieu, que de ce Point l'ouvrage est merveilleux ! On travaille aujourd'hui, d'un air miraculeux ; Jamais, en toute chose, on n'a vu si bien faire.	920
Elmire	Il est vrai. Mais parlons un peu de notre affaire. <u>O</u> n tient que mon Mari veut dégager sa foi, Et vous donner sa Fille. Est-il vrai, dites-moi ?	
Tartuffe	Il m'en a dit deux mots : mais, Madame, à vrai dire, Ce n'est pas le bonheur après quoi je soupire ; Et je vois autre part les merveilleux attraits De la félicité qui fait tous mes souhaits.	925
Elmire	C'est que vous n'aimez rien des choses de la Terre.	
Tartuffe	Mon sein n'enferme pas un cœur qui soit de pierre.	930
Elmire	Pour moi, <u>J</u> e crois qu'au Ciel tendent tous vos soupirs, Et que rien, ici-bas, n'arrête vos désirs.	
Tartuffe	L'amour qui nous attache aux Beautés éternelles, N'étouffe pas en nous l'amour des temporelles. Nos sens facilement peuvent être charmés Des ouvrages parfaits que le Ciel a formés. Ses attraits réfléchis brillent dans vos pareilles : Mais il étale en vous ses plus rares merveilles. Il a sur votre face épanché des beautés, Dont les yeux sont surpris, et les cœurs transportés ; Et je n'ai pu vous voir, parfaite Créature, Sans admirer en vous l'Auteur de la Nature, Et d'une ardente amour sentir mon cœur atteint,	935 940

	Au plus beau des Portraits où lui-même il s'est peint.	
	D'abord j'appréhendai que cette ardeur secrète	945
	Ne fût du noir Esprit une surprise adroite ;	
	Et même à fuir vos yeux, mon cœur se résolut,	
	Vous croyant un obstacle à faire mon salut.	
	Mais enfin je connus, ô Beauté toute aimable,	
	Que cette passion peut n'être point coupable ;	950
	Que je puis l'ajuster avecque la pudeur,	
	Et c'est ce qui m'y fait abandonner mon cœur.	
	Ce m'est, je le confesse, une audace bien grande,	
	Que d'oser, de ce cœur, vous adresser l'offrande ;	
	Mais j'attends, en mes vœux, tout de votre bonté,	955
	Et rien des vains efforts de mon infirmité,	
	En vous est mon espoir, mon bien, ma quiétude :	
	De vous dépend ma peine, ou ma béatitude ;	
	Et je vais être enfin, par votre seul arrêt,	
	Heureux, si vous voulez ; malheureux, s'il vous plait.	960
Elmire	La déclaration est tout à fait galante :	
	Mais elle est, à vrai dire, un peu bien surprenante.	
	Vous deviez, ce me semble, armer mieux votre sein,	
	Et raisonner un peu sur un pareil dessein.	
	Un Dévot comme vous, et que partout <u>on</u> nomme...	965
Tartuffe	Ahl pour être Dévot, je n'en suis pas moins homme ;	
	Et lorsqu'on vient à voir vos célestes appas,	
	Un cœur se laisse prendre, et ne raisonne pas.	
	Je sais qu'un tel discours de moi paraît étrange ;	
	Mais, Madame, après tout, je ne suis pas un Ange ;	970
	Et si vous condamnez l'aveu que je vous fais,	
	Vous devez vous en prendre à vos charmants attraits.	
	Dès que j'en vis briller la splendeur plus qu'humaine,	
	De mon intérieur vous fûtes souveraine.	
	De vos regards divins, l'ineffable douceur,	975
	Força la résistance où s'obstinaît mon cœur ;	
	Elle surmonta tout, jeûnes, prières, larmes,	
	Et tourna tous mes vœux du côté de vos charmes.	
	Mes yeux, et mes soupirs, vous l'ont dit mille fois ;	
	Et pour mieux m'expliquer, j'emploie ici la voix.	980
	Que si vous contemplez, d'une âme un peu bénigne,	
	Les tribulations de votre Esclave indigne ;	
	S'il faut que vos bontés veuillent me consoler,	
	Et jusqu'à mon néant daignent se ravalier,	
	J'aurai toujours pour vous, ô suave merveille,	985
	Une dévotion à nulle autre pareille.	
	Votre honneur, avec moi, ne court point de hasard ;	
	Et n'a nulle disgrâce à craindre de ma part.	
	Tous ces Galants de Cour, dont les Femmes sont folles,	
	Sont bruyants dans leurs faits et vains dans leurs paroles.	990
	De leurs progrès sans cesse on les voit se targuer ;	
	Ils n'ont point de faveurs, qu'ils n'aillent divulguer ;	
	Et leur langue indiscreète, en qui l'on se confie,	

	Déshonore l'Autel où leur cœur sacrifie :	
	Mais les Gens comme nous, brûlent d'un feu discret,	995
	Avec qui pour toujours on est sûr du secret.	
	Le soin que nous prenons de notre renommée	
	Répond de toute chose à la Personne aimée ;	
	Et c'est en nous qu'on trouve, acceptant notre cœur,	
	De l'amour sans scandale, et du plaisir sans peur.	1000
Elmire	Je vous écoute dire, et votre Rhétorique,	
	En termes assez forts, à mon âme s'explique.	
	N'appréhendez-vous point, que je ne sois d'humeur	
	À dire à mon Mari cette galante ardeur ?	
	Et que le prompt avis d'un amour de la sorte,	1005
	Ne pût bien altérer l'amitié qu'il vous porte ?	
Tartuffe	Je sais que vous avez trop de bénignité,	
	Et que vous ferez grâce à ma témérité ;	
	Que vous m'excuserez sur l'humaine faiblesse	
	Des violents transports d'un amour qui vous blesse ;	1010
	Et considérerez, en regardant votre air,	
	Que l'on n'est pas aveugle, et qu'un Homme est de chair.	
Elmire	D'autres prendraient cela d'autre façon peut-être ;	
	Mais ma discrétion se veut faire paraître.	
	Je ne redirai point l'affaire à mon Époux ;	1015
	Mais je veux en revanche une chose de vous.	
	C'est de presser tout franc, et sans nulle chicane,	
	L'union de Valère avecque Mariane,	
	De renoncer vous-même à l'injuste pouvoir	
	Qui veut du bien d'un autre enrichir votre espoir ;	
	Et...	

タルチュフ 神のすべての御恵みにより、おんみの魂と肉体に幾久しく健康の授けられんことを。神の愛に靈感を受くる者のうち、もっとも賤しき者の望むままに、おんみの日々が祝福されんことを。

エルミール ありがたいお祈り、痛み入ります。椅子にでもかけて、すこし楽にしようじゃございませんか。

タルチュフ (腰を下ろし) ご病氣もすっかりよくなりましたようですか？

エルミール (腰を下ろし) ええもう、おかげさまで。熱も間もなくとれまして。

タルチュフ わたしの祈りは天からそのようなお恵みをいただくほどの値打はありません。でも、ひたすら奥さまのご平癒を願って、熱烈な祈りをささげたのです。

エルミール わたくしにたいするご好意のあまり、ずいぶんお心をお痛めになりましたのね。

タルチュフ 奥さまの大切な健康は、どれほど大切にしても、しすぎるということはありません。ご回復のためとあらば、喜んでわたしの健康を投げ出したところです。

エルミール それではキリスト教徒としてのお慈悲がすぎるというものでございますわ。ご親切のかずかず、心からお礼申しあげます。

タルチュフ 奥さまのお人柄を思えば、わたしのすることなど、取るに足りません。

エルミール わたくし、ある事柄について、内々にご相談申しあげたいと存じまして。ここにだれも見ている者がいないのは、なによりですわ。

タルチュフ わたしも喜んでおりますよ。奥さまと差し向かいでいられるとは、まったく欣快にたえません。そのような機会をお授けくださるよう、神に祈ってまいりましたが、これまでのところ、まだその願いはききいれられませんでした。

エルミール わたくしは、ほんのひとことご相談申しあげたいのですが、お心を打ち割って、腹藏なくおっしゃってくださいまし。

- (ダミス、姿は見せないで、この会話を立ち聞きするために隠れた小部屋の扉を細目に開ける)
- タルチュフ** わたしも、この千載一遇の好機に、心のうちをすっかりお目にかけたいと存じます。誓って申しあげましょう、奥さまの魅力にひかれて、たくさんの客がこの家に出入りすることにたいし、これまでいろいろやかましく申しあげてまいりましたが、それは決して憎しみの心から出たのではなく、ひとえに奥さまのおためを思う情熱、純粋な気持ちから……
- エルミール** わたくしもそう思っております。わたくしの魂を救おうとして、いろいろ気をつけてくださいますのね。
- タルチュフ** (エルミールの指先を握って) そうです、奥さま、もちろんです、この燃えるような情熱……
- エルミール** まあ、痛い！そんなに強くお握りになって。
- タルチュフ** 熱意のあまりです。奥さまを痛い目にあわせようとは、思いも寄らぬこと。そのくらいなら、いっそ……
- (手をエルミールの膝にのせる)
- エルミール** そのお手でなにをなすっていらっしゃるんです？
- タルチュフ** お召物にさわっているのです。柔らかい布地ですな。
- エルミール** まあ、お願い、おやめになって。くすぐったいんですもの。
- (彼女は椅子をあとにずらす。タルチュフは自分の椅子を近づける)
- タルチュフ** (エルミールの肩掛けにさわって) これはまたみごとな細工でございますなあ！近頃はすばらしいものができるようになりましたが、これほど出来のいいのを拝見するのは、これが初めてで。
- エルミール** そのとおりですわ。でも、用件をすこしお話しいたしましょう。主人は約束を取り消して、娘をあなたに差しあげようとしているとか (vv.923-924)。ほんとうでございましょうか？
- タルチュフ** そんなことを、ちょっとおっしゃいましたが、じつを言うと奥さま、それはわたしの求める仕合せではないのです。わたしのありとあらゆる願いをかなえてくれる幸い、こよなき魅力、それはもっと別なところにあるのです。
- エルミール** それというのも、あなたはこの地上のものをなにひとつ愛していらっしゃらないからでございましょう。
- タルチュフ** わたしの胸にだって、石の心臓がはいっているわけではありません。
- エルミール** わたくし、こう思っておりましたわ、あなたの願いはすべて天に向けられ、この世のものはひとつとしてあなたの望みを掻き立てるようなことはないのだと。
- タルチュフ** われらを永遠の美に結びつける愛も、地上のものにたいする愛を窒息させはしないのです。われらの感覚は神の造りたもうた完璧な作品に、たやすく魅了されてしまうのです。あなたがた女性のなかには、神々しい魅力がかがやいています。とりわけ、神はあなたのなかに、たぐいまれな魅力をお示しになったのです。目を驚かせ、心を陶然とさせる美しさはあなたのお顔に満ちあふれています。完璧なる被造物とも申すべきあなた、わたしはあなたを眺めるたびに、造化の神をたたえずにはいられませんでした。神がみずからの姿を描きたもうたもっとも美しい絵姿を前にして、わが心は燃ゆるがごとく愛情にとらえられたのです。最初のうち、このひそやかな情熱は悪魔の仕掛けた巧みな罠ではなかろうかと思ひ、あなたのまなざしを避けようと決心したこともありました。わたしの救霊の障害物はあなただと考えたからです。しかし、おお、いとしくもうるわしき女性、わたしもついには認めざるをえなかったのです。この情熱が罪ぶかきものであるはずはなく、それは貞潔と結びつけうるものであることを。このようにして、わたしは心のおもむくままに、その情熱に身を任せました。この心をあえてあなたにささげようというのは、まことに大胆不敵なことと申さねばなりません。しかし、わたしの願いは、すべて奥さまのご好意にかかっており、かよわきわが身のむなしい努力など、さらさらあてにしているのではございません。わたしの望み、わが幸福、わが心の安らぎ、すべてはあなたのうちにあるのです。わたしが苦しみ悩むか、あるいはこよなき幸いに恵まれるか、ひとえにあなたのお気持ち次第。要するに、わたしはあなたのお考えひとつで、幸福にも不幸にもなれるのです。
- エルミール** ずいぶん粋な告白をなさいますこと。でも、じつを言うと、いささかびっくりいたしました。あなたはお心をもうすこし堅固にお持ちになり、このような事柄については、もっと筋道を立ててお考えになるのが当然だと思いますわ。あなたのように信心ぶかく、いたるところでその名

を…… (v.965)

タルチュフ 信心ぶかいからといって、わたしが人間であることに変わりはありません。あなたの清らかな美しさを見れば、心はとらえられ、筋道を立てて考えることなど、できなくなってしまう。わたしがこのように申しあげるのは、意外だと思われるかもしれませんが。しかし、奥さま、なんといってもわたしは天使ではないのです。わたしの告白を非難なさるより、人を恍惚たらしむるあなたの魅力をお咎めになるべきではないでしょうか。この世のものとは思われぬ美しさがかがやくのを見て以来、わが心はあなたのとりことになりました。あなたの清らかなまなごしのえも言われぬ優しさ、それはあくまで逆らおうとするわが心を征服してしまいました。断食も、祈りも、涙も、すべてはなんの甲斐もなく、わが願いのことごとくが、あなたの魅力のほうへと向けられてしまったのです。わが目、わがため息は、すでに何度となく、そのことをあなたにうったえましたが、さらによく思いのたけを伝えるために、わたしはいま、声の力をかりるのです。取るに足らぬあなたの奴隷の、果て知れぬ悩みを、いささかの思いやりをもって眺めたまい、優しきお心にてわたしをなぐさめ、荒涼たるわが魂の底まで降り立ちたもうならば、おお、甘美なるこの世の奇蹟よ、わたしはたぐいなき献身の誠を末長くあなたにささげるであります。わたしとならば、あなたの名誉に傷のつくおそれはなし、わたしのほうからあなたを見棄てるなどということが、よもあろうはずはございません。ご婦人がたが夢中になっている宮廷のあの優男たち、ああいう連中はすることが騒がしくて、その言葉に誠意がありません。恋の手管が上達したといって、しょっちゅう得意の鼻をうごめかし、女から親切にされれば、あたりかまわず吹聴してまわります。ご婦人がたは、あてにもならぬかれらの舌を信用しておいでだが、それこそ心をささげる祭壇をけがすというものです。しかし、われらのように、つつしみぶかい恋の火に燃える者を相手にすれば、いつまでも秘密の洩れるおそれはありません。自分の評判を大切にするので、愛する女に迷惑のかからぬよう、全責任をとるのです。われらの恋を受け入れてくだされば、醜聞のともなわぬ恋、恐れなき快樂を味わうことができるのです。

エルミール よくわかりました。ずいぶん激しいお言葉をおつかいになりますが、そういうものの言いかたも、納得できないわけではありません。でも、あなたは心配なさらないんです。ああいう甘い口説が、わたくしから主人の耳に筒抜けになりはしないか、いきなりあんなふうに恋を打ち明けて、主人があなたにたいして抱いている友情の念を、そこないはしまいかということ？

タルチュフ あなたはたいへんお優しいかた、わたしのはしたないふるまいを許してくださるでしょう。恋しさのあまりつい取り乱して、奥さまのお気持を傷つけたにしても、人間につきものの弱さとして、大目に見てくださると信じております。ご自分の美しいお姿のことをお考えいただきたいものです。わたしが盲でないからといって、また人間が肉体でできているからといって、お責めになるのはちとひどいではございませんか。

エルミール ほかの女でしたら、そのお言葉を違った意味に受け取るかもしれません。でもわたくしはつつしみぶかくふるまいたいと存じます。このことにつきましては、主人にはなんにも申しませんが、その代わり、ひとつお願いがあるのです。ヴァレールとマリアーヌの縁談がとどこおりなくまとまるよう、力をおかしく下さいませ。横から水を差さないでくださいまし。あなたご自身もあの子の父親の間違った権力を利用したりなさらぬよう、他人の財産に目をつけて、それを手に入れようなどとなさらないでくださいまし。それから……

この場面でのエルミールは、タルチュフの「愛の告白」をかわしながら、最後に娘との結婚を断念させようと頼む。彼女の台詞には第1幕で見られるような「on」はほとんど見られない。923行目と965行目の2か所にしかあらわれない⁵。ここでの「on」はオルゴンのことを指している。彼女自身の台詞は一般的な1人称の主語「je」である (vv. 883, 895, 897, 911, 931, 1001, 1003, 1015)。

一方、タルチュフの偽善を夫にじかに確認させる第4幕第3場から第5場ではエルミール

5 日本語の訳文では「on」を特定することは難しい。そのため、該当する文全体に下線を引き、また原文の場所となる行数を

示した。以下も同じ。

の文体は違った様相を見せる。とくに第5場はエルミールがわざとタルチュフに言い寄らせる場を設定し、夫が机の下に隠れて事の成り行きを見守るという喜劇的効果の高い場面であり、エルミールの台詞はタルチュフに聞かせることを第一の目的としながら、机の下に隠れた夫にも聞かせるためのものである。当然観客の方にもむけられている。

Tartuffe	On m'a dit qu'en ce lieu vous me vouliez parler.	
Elmire	Oui, l'on a des secrets à vous y révéler. Mais tirez cette porte avant qu'on vous les dise, Et regardez partout de crainte de surprise :	1390
	Une affaire pareille à celle de tantôt, N'est pas assurément ici ce qu'il nous faut. Jamais il ne s'est vu de surprise de même, Damis m'a fait pour vous une frayeur extreme, Et vous avez bien vu que j'ai fait mes efforts	1395
	Pour rompre son dessein, et calmer ses transports. Mon trouble, il est bien vrai, m'a si fort possédée, Que de le démentir je n'ai point eu l'idée :	1400
	Mais par là, grâce au Ciel, tout a bien mieux été, Et les choses en sont dans plus de sûreté. L'estime où l'on vous tient, a dissipé l'orage, Et mon Mari, de vous, ne peut prendre d'ombrage. Pour mieux braver l'éclat des mauvais jugements, Il veut que nous soyons ensemble à tous moments ;	1405
	Et c'est par où je puis, sans peur d'être blâmée, Me trouver ici seule avec vous enfermée, Et ce qui m'autorise à vous ouvrir un cœur Un peu trop prompt peut-être à souffrir votre ardeur.	
Tartuffe	Ce langage, à comprendre, est assez difficile, Madame, et vous parliez tantôt d'un autre style.	1410
Elmire	Ah ! si d'un tel refus vous êtes en courroux, Que le cœur d'une Femme est mal connu de vous ! Et que vous savez peu ce qu'il veut faire entendre, Lorsque si faiblement on le voit se défendre !	1415
	Toujours notre pudeur combat dans ces moments, Ce qu'on peut nous donner de tendres sentiments. Quelque raison qu'on trouve à l'amour qui nous dompte, On trouve à l'avouer, toujours un peu de honte ; On s'en defend d'abord ; mais de l'air qu'on s'y prend, On fait connaître assez que notre cœur se rend ;	1420
	Qu'à nos vœux, par honneur, notre bouche s'oppose, Et que de tels refus promettent toute chose. C'est vous faire, sans doute, un assez libre aveu, Et sur notre pudeur me ménager bien peu :	1425
	Mais puisque la parole enfin en est lâchée, À retenir Damis me serais-je attachée, Aurais-je, je vous prie, avec tant de douceur, Écouté tout au long l'offre de votre cœur ? Aurais-je pris la chose ainsi qu'on m'a vu faire,	

	Si l'offre de ce cœur n'eût eu de quoi me plaire ?	1430
	Et lorsque j'ai voulu moi-même vous forcer A refuser l'hymen qu'on venait d'annoncer, Qu'est-ce que cette instance a dû vous faire entendre, Que l'intérêt qu'en vous <u>on</u> s'avise de prendre,	
	Et l'ennui qu'on aurait que ce nœud qu' <u>on</u> résout,	1435
Tartuffe	Vint partager du moms un cœur que l' <u>on</u> veut tout ? C'est sans doute, Madame, une douceur extreme, Que d'entendre ces mots d'une bouche qu'on aime : Leur miel, dans tous mes sens, fait couler à longs traits Une suavité qu'on ne goûta jamais.	1440
	Le bonheur de vous plaire, est ma suprême étude, Et mon cœur, de vos vœux, fait sa beatitude ; Mais ce cœur vous demande ici la liberté, D'oser douter un peu de sa félicité.	
	Je puis croire ces mots un artifice honnête,	1445
	Pour m'obliger à rompre un hymen qui s'apprête ; Et s'il faut librement m'expliquer avec vous, Je ne me fierai point à des propos si doux, Qu'un peu de vos faveurs, après quoi je soupire, Ne vienne m'assurer tout ce qu'ils m'ont pu dire,	1450
Elmire	Et planter dans mon âme une constante foi Des charmantes bontés que vous avez pour moi. <i>Elle tousse pour avertir son mari.</i>	
	Quoi ? vous voulez aller avec cette vitesse, Et d'un cœur, tout d'abord, épuiser la tendresse ? <u>On</u> se tue à vous faire un aveu des plus doux,	1455
	Cependant ce n'est pas encore assez pour vous ; Et l' <u>on</u> ne peut aller jusqu'à vous satisfaire, Qu'aux dernières faveurs on ne pousse l'affaire ?	
Tartuffe	Moins on mérite un bien, moins on l'ose espérer ; Nos vœux, sur des discours, ont peine à s'assurer ;	1460
	On soupçonne aisément un sort tout plein de gloire, Et l'on veut en jouir avant que de le croire. Pour moi, qui crois si peu mériter vos bontés, Je doute du bonheur de mes témérités ;	
	Et je ne croirai rien, que vous n'ayez, Madame, Par des réalités, su convaincre ma flamme.	1465
Elmire	Mon Dieu, que votre amour en vrai tyran agit ! Et qu'en un trouble étrange il me jette l'esprit ! Que sur les cœurs il prend un furieux empire ! Et qu'avec violence il veut ce qu'il desire !	1470
	Quoi ! de votre poursuite, <u>on</u> ne peut se parer, Et vous ne donnez pas le temps de respirer ? Sied-il bien de tenir une rigueur si grande ? De vouloir sans quartier, les choses qu' <u>on</u> demande ? Et d'abuser ainsi, par vos efforts pressants,	1475
Tartuffe	Du faible que pour vous, vous voyez qu'ont les Gens ? Mais si d'un œil bénin vous voyez mes hommages, Pourquoi m'en refuser d'assurés témoignages ?	

Elmire	Mais comment consentir à ce que vous voulez, Sans offenser le Ciel, dont toujours vous parlez ?	1480
Tartuffe	Si ce n'est que le Ciel qu'à mes vœux on oppose, Lever un tel obstacle, est à moi peu de chose, Et cela ne doit pas retenir votre cœur.	
Elmire	Mais des Arrêts du Ciel <u>on</u> nous fait tant de peur.	
Tartuffe	Je puis vous dissiper ces craintes ridicules, Madame, et je sais l'art de lever les scrupules. Le Ciel défend, de vrai, certains contentements ; <i>(C'est un Scélérat qui parle.)</i>	1485
	Mais on trouve avec lui des accommodements ; Selon divers besoins, il est une Science, D'étendre les liens de notre conscience, Et de rectifier le mal de l'action Avec la pureté de notre intention.	1490
	De ces secrets, Madame, on saura vous instruire ; Vous n'avez seulement qu'à vous laisser conduire. Contentez mon désir, et n'ayez point d'effroi, Je vous réponds de tout, et prends le mal sur moi. Vous toussiez fort, Madame.	1495
Elmire	Oui, <u>je</u> suis au supplice.	
Tartuffe	Vous plaît-il un morceau de ce jus de Réglisse ?	
Elmire	C'est un rhume obstiné, sans doute, et <u>je</u> vois bien Que tous les jus du monde ici ne feront rien.	1500
Tartuffe	Cela, certes, est fâcheux.	
Elmire	Oui, plus qu' <u>on</u> ne peut dire.	
Tartuffe	Enfin votre scrupule est facile à détruire, Vous êtes assurée ici d'un plein secret, Et le mal n'est jamais que dans l'éclat qu'on fait. Le scandale du monde, est ce qui fait l'offense ; Et ce n'est pas pécher, que pécher en silence.	1505
Elmire, <i>après avoir encore toussé.</i>	Enfin <u>je</u> vois qu'il faut se résoudre à céder, Qu'il faut que <u>je</u> consente à vous tout accorder ; Et qu'à moins de cela <u>je</u> ne dois point prétendre Qu' <u>on</u> puisse être content, et qu'on veuille se rendre.	1510
	Sans doute, il est fâcheux d'en venir jusque-là, Et c'est bien malgré moi, que <u>je</u> franchis cela : Mais puisque l' <u>on</u> s'obstine à m'y vouloir réduire, Puisqu' <u>on</u> ne veut point croire à tout ce qu'on peut dire, Et qu' <u>on</u> veut des témoins qui soient plus convaincants, Il faut bien s'y résoudre, et contenter les Gens. Si ce consentement porte en soi quelque offense, Tant pis pour qui me force cette violence ; La faute assurément n'en doit pas être à moi.	1515
Tartuffe	Oui, Madame, on s'en charge, et la chose de soi...	1520
Elmire	Ouvrez un peu la Porte, et voyez, <u>je</u> vous prie, Si mon mari n'est point dans cette Galerie.	
Tartuffe	Qu'est-il besoin pour lui, du soin que vous prenez ? C'est un Homme, entre nous, à mener par le nez.	

De tous nos entretiens, il est pour faire gloire, 1525
 Et je l'ai mis au point de voir tout, sans rien croire.
 Elmire Il n'importe, sortez, je vous prie, un moment,
 Et partout, là, dehors, voyez exactement.

この場面の日本語訳は次のようになる。

タルチュフ こちらでなにかお話があるとか。

エルミール ええ、あなたにこっそり打ち明けたいことがあるんですの (v.1388)。でも、お話しする前に、その戸を閉めていただけませんか (v.1389)。ぬすみ聞きされないように、あたりをよく見まわしてください。(タルチュフ、扉を閉めに行き、戻って来る) さっきのようなことがあると困りますもの。あんなにびっくりしたことはありませんわ。ダミスが失礼なことを言いだすもんで、ほんとにハラハラいたしました。でも、ごらんとおり、わたくし、逆上したあの子をなだめ、計画を思いとどまらせるのに大骨を折りました。わたくしもすっかり取り乱して、あの子の言葉を打ち消すことさえ忘れるほどでした。でもおかげで、なにもかもうまく行って、もうなんの心配もなくなりました。主人はあなたを尊敬しておりますので (v.1402)、疑いのかげらさえも持ち合わせておりません。悪いうわさがパッとひろまっても、かまうことはありません、おまえたちふたりはいつもいっしょにいるがいい、と申しております。ですから、こうしてここに、あなたとふたりきりで閉じこもっていても、だれに咎められる心配もないわけです。これであなたに心を打ち明けることができますわ。あなたの愛のお言葉にお応えするのはすこし早すぎるかもしれませんが。

タルチュフ そのお言葉はちと受け取りにくいですな、奥さま。さっきとはだいぶ調子が違いますからね。

エルミール まあ！さっきあんなふうにおことわりしたからってお腹立ちになるなんて、あなたは女心というものをまるでご存じないんですね！女がほんのはかない抵抗しか示さないとき (v.1416)、それがなにを意味するのか、よくおわかりになりませんの！あんな場合、女の羞恥心はいつも男のささげる愛情に逆らうものですわ。恋のとりこになっているとわかっていても、自分で口に出して言うのは、いつだってすこし恥づかしいものですわ。最初はまずはねつける、でもそのときの様子で、心ではなびいているのだ、きまりが悪いので心にもないことを言っているのだ (vv.1417-1420)、こういうことわりかたは、なにもかも約束しているのだ、ということ、をはっきりわからせるものですわ。こんなことをあけすけに打ち明けては、女の羞恥心もなにもあったものじゃございませんが、言いだしたからには、思いきって申しあげましょう。あなたに言い寄られたのがうれしくなかったら、あんなにむきになってダミスをおさえつけたのでしょうか？あなたの愛の言葉に、あれほど胸をときめかせて耳を傾けたのでしょうか？ (v.1429) さっきごらんになったような態度を、わたくしが取ったのでしょうか？主人が娘とあなたの縁組のことを言いだしたとき、あなたにことわっていただくよう、わたくしのほうから仕向けたのも、あなたを思えばこそこのことですし、この縁談がまとまれば、せつかくひとり占めにできたはずのお心を、娘と分け合わねばならなくなる——その切なさを、ぜひあなたにわかっていただきたかったからですわ。(vv.1435-1436)

タルチュフ 奥さま、愛する女の口からそのようなお言葉をうかがうのは、たしかにこの上もない喜びです。その蜜のような甘さは、わたしの五官に深くしみわたり、かつて味わったことのない快さを覚えずにはいられません。奥さまのお気に入ることができれば、これにまさる仕合せはないと、かねがね思っておりました。奥さまにお気持ちを打ち明けられ、わたしは天にもものぼる心地です。しかし率直に申せば、心からの喜びにひたる前に、わたしはいささかの疑惑を感じないではいられません。いまのお言葉は、わたしをそそのかして、まとまりかけた縁談をこわそうとする巧みな策略とも受け取れます。打ち割って申しあげれば、奥さまのご寵愛こそわたしの求めてやまぬものではございますが、そのご寵愛のしるしが多少なりともお言葉の裏書をするまでは、そしてまた、わが心を恍惚たらしむる奥さまのご愛情にたいし、ゆるきなき確信をこの胸に植えていただくまでは、どんな甘いお言葉も信じる気になれないのです。

エルミール (夫の注意をひくために咳をする) まあ！なにもそんなに大いそぎで、いきなり愛情のすべてを汲みつくしてしまうようなことをなさらなくてもいいじゃありませんか。心のたけを打ち

明けるだけで死ぬほどの思いですのに (v.1455)、それだけでは足りなくて、とことんまで愛のしるしを見せなければ (v.1457)、満足していただけませんか？

タルチュフ 幸福に値しない人間は、それを望むこともすくないものです。恋する男は言葉だけで安心できるものではありません。栄光にみちた運命にも、いつ暗い影がささないとも限りません。だからこそ、信じる前に、それを手に入れようと願うのです。わたしは奥さまのご好意を受けるに値しない人間だと考えております。それゆえ、自分の向こう見ずな行為のもたらした幸福に疑いをはさみ、奥さまが現実になんかの恋心を満足させてくださるまでは、なにひとつ信じる気になれないのです。

エルミール おやまあ！あなたの恋はまるで暴君のようにふるまうんですね。わたくし、すっかり気持が乱れてしまいました。ひとの心を力づくでおさえつけ、無理やり欲しいものを手に入れようとなさいますのね。ほんとに、あなたに追いつめられると、身を守ることができませんわ！ (v.1471) 息つくひまもないんですもの。手きびしく詰め寄って、欲しいものをがむしゃらにおねだりになる、こちらの弱味につけこんで、遠慮会釈もなくお求めになる (v.1474)、そんなことをなすって、よろしいものでございましょうか？

タルチュフ しかし、わたしの讃辞を慈愛の目をもってごらんになるのであれば、なぜその確かな証拠を見せようとなさらないのです。

エルミール でも、あなたがいつもお口になさる神の御心を傷つけることなしに、どうしてお望みをかなえることができますでしょうか？

タルチュフ わたしの願いをさまたげるのが神の御心だけでしたら、そんな邪魔物を取りのけるのは、わたしには造作もないことです。べつに心配なさるにおよびません。

エルミール でも、わたくし、神のお裁きが怖くてなりませんわ！ (v.1484)

タルチュフ そんな愚かしい恐怖はあとかたもなく吹き飛ばしてあげましょう。奥さま、わたしは不安を取りのぞくすべをわきまえています。なるほど、神はある種の快楽を禁じておいでになる。しかし、神と折り合いをつける道がないわけじゃありません。必要に応じて、良心のきずなをゆるめ、悪しき行為を、意図の純粹さをもって訂正する学問があるのです。ひとつその秘密を奥さまにお教えいたしましょう。あなたはただ、わたしの言ひなりになっていらっしゃる方がいいのです。わたしの望みをかなえてください。なにひとつ恐れることはありません。わたしがなにかも引き受けて、ご迷惑がからないようにします。(エルミール、さらに激しく咳をする) ひどくお咳きになるようですね、奥さま。

エルミール ええ、とても苦しいんですの (v.1497)。

タルチュフ (エルミールに漏斗状の紙包を差し出して) この甘草の汁をすこしお飲みになったら？

エルミール きっと、しつこい風邪なんですわ。どんな煎じ薬を飲んでもきかないような気がします (v.1499)。

タルチュフ お困りでしょうな、それは。

エルミール ええ、口に出しては言えないくらい (v.1501)。

タルチュフ 要するに、奥さまの不安を解消するのは造作もないことです。この際、奥さまは完全に秘密を保証されています。悪事が悪事になるのは、人が騒ぎ立てるからですよ。こっそり罪を犯すのは罪を犯すことにはなりません。

エルミール (また咳をしてテーブルをたたいてから) どうやらお言葉に従ってなにかもかもお許しする時が来たようですわ。(以下のせりふはオルゴンにかける) そうでもしなければ、満足してもいただけず (v.1510)、まいったとおっしゃらないでしょうからね。たしかに、こんなことまでするのは、いけないことですわ。女の道を踏み越えるのも、わたしのせいじゃありません。でも、どうしてもそこまで行かなければならないように仕向け、ひとの言うことはなにひとつ信用なさらず、もっとはっきりした証拠を出せとおっしゃるんですもの。 こうなれば、覚悟をきめて、ご満足がゆくようにいたしましょう。わたしがこうして承知するのが、いけないことだとしたら、それは無理やりそうさせた人がいけないんですわ、もちろんわたしのせいじゃないことよ。

タルチュフ そうですとも、奥さま。わたしが引き受けます。そうすれば、自然と……

エルミール ちょっと戸を開けて、廊下に主人がいないか、見てくださいな。

タルチュフ ご主人なんかこそう気をつかうことはありませんよ。ここだけの話ですが、あれはどうにでも引きまわせる人ですからね。われわれの話の聞いたら、光栄に思うでしょう。それにわたし

は、なにを見ても信じないように、あの人を仕込んでおきましたから。

エルミール ともかく、ちょっと外へ出て、あたりによく目をくばってくださいな。

この場面では第3幕での台詞とは異なり、エルミールに台詞に「on」が多く用いられている。下線を引いたところがその部分である。台詞全体の量に大きな差はないが「on」の使用頻度は前者では2回しかなかったにもかかわらず、ここでは23回ある。1388行目と1389行目の「on」は「自分自身」を指す一人称としての意味をもつ。1416行目の「on」は「恋人というものは」という一般的な意味で使われる。1417行目と1420行目は「私たち女性は」という意味で。1433行目から1436行目、1455行目から1458行目は「私たち女性は」という意味から「彼女自身」へと少し変化してくる。この場面での「on」の使い方について *Petits Classiques* の編者は次のように書いている。

Ce pronom permet d'instaurer une distance et de voiler des réalités inconvenantes ou difficile à dire. Pour Elmire, la distance est un moyen de diminuer la force du mensonge : ne parlant pas d'elle-même à la première personne elle se masque sous un « on » dont ceux qui savent qu'elle joue la comédie comprennent qu'il ne désigne pas vraiment.⁶

このように、代名詞「on」を使うことで、彼女自身の台詞の舞台でしめす役割がみえてくる。話の内容と彼女自身の間に距離感が生じていると考えられる。彼女のタルチュフへの言葉が本心から出たものではないということも観客にはつたわることになる。

しかしこのあとにつづく場面では彼女の表現に大きな変化が見られる。この場面は、タルチュフに言い寄られ、もう逃げ場のなくなったエルミールがテーブルの下に隠れたオルゴンに必死に訴えかける場面である。ここでは、「on」は「人は」という不特定な人称でも「私」もしくは「私たち女性」という意味でもない。「あなた」もしくは「あなたがた」の意味に変化している。そして同時に、本来の1人称の「je」が増えてくる。1507行目からの台詞をフランス語で見てみよう。

ここではまず最初に「je」が3度立てつづけに出てくる。つづく1510行目の「on」はここでは「je」と対立する存在となってくる。「on」はオルゴンにむけて発せられていることは明らかだ。彼女自身の行為については「je」が使われる。この語はまぎれもなく一人称であり、彼女の強い意志を示している。しかもそれぞれ「il faut」と「devoir」、ともに「～しなければならない」という強い意味をもつ表現とセットで用いられている。1511行目冒頭の「sans doute」も古典フランス語では現在の「多分」というあいまいな意味ではなく「間違いなく」という強い限定を示す語句である。この場面はエルミールがタルチュフに話しかけているように見えるが実際はテーブルの下に隠れたオルゴンに語りかけている⁷。それ以前の場面ではオルゴンにそれとなく聞かせるだけだったのに対して、ここでは明らかに彼女

6 *Le Tartuffe, Dossier pédagogique*. p.58. 「この代名詞は距離感を感じさせずして言いにくい真実を隠すのに適している。エルミールにとって距離感とはうそをつくことの抵抗力を弱めることになる。1人称で話さないことからこの「on」を使うことで彼女が演じていることを知っている人には真実をつ

たえていないということがわかる。」

7 日本語の訳ではト書きとして「(以下のせりふはオルゴンにかける)」と書き加えられているがオリジナルのフランス語にはその記載はない。

自身の言葉としてオルゴンに聞かせているのである。

エルミールは自分の身を危険にさらしながら、タルチュフの偽善を暴きだす。この場面での「on」の使い方、そして「on」から「je」への変化は、劇構造とも深くかかわりながら極めて効果的といえるであろう。

モリエールの作品に登場する女性は、冒頭でも記したように『女房学校』のアニェス、『ミザントロープ』のセリメヌのように受身の存在が多い。また、『タルチュフ』のドリーヌのように女中として、責任ある立場ではなく一種の傍観者として劇構造の中に置かれることが多い⁸。エルミールのように作品の展開に深くそして主体的にコミットする人物は少ない。このような人物を配置しているという点で『タルチュフ』はモリエールの作品の中でも特異な存在である。そして、エルミールはモリエールの作品全体の中でも、主体的に動く女性として魅力ある存在といえよう。残念ながら日本語の翻訳ではこのように同じ一つの語がさまざまな人称を示すことができる語が無い⁹ため、言葉の面からエルミールに光を当てることは難しいが、このことを意識しながら彼女の役割を再検討してみる余地はあるであろう。エルミールは劇構造の中では比較的控えめな存在として描き出されてきたが、彼女の言葉に光を当てることにより、『タルチュフ』に今までとは異なる新しい世界を繰り広げる可能性を秘めているのではないだろうか。

参考文献

- Molière, *Œuvre complètes*, 2 vols., éd. par Georges Forestier «Bibliothèque de la Pléiade». Paris, Gallimard, 2010.
- Molière, *Œuvre complètes*, 2 vols., éd. par Georges Couton «Bibliothèque de la Pléiade». Paris, Gallimard, 1976 (1971).
- Molière, *Le Tartuffe*, éd. par Gérard Ferreyrolles et Delphine de Garidel «Petits classiques Larousse». Paris, Larousse, 2003 (1998).
- Molière, *Le Tartuffe*, éd. par Bernard Combeaud «Classiques Hachette». Paris, Hachette, 2002 (1992).
- Gérard Ferreyrolles et Delphine de Garidel, *Le Tartuffe, dossier pédagogique*. Paris, Larousse, 1998.
- Christophe Mory, *Molière* «folio biographies». Paris, Gallimard, 2007.
- Roger Duchêne, *Molière*. Fayard, 1998.
- Jean Emelina, *Les Valets et les servantes dans le théâtre comique en France de 1610 à 1700*. Grenoble, Presse Universitaire de Grenoble et Cannes, Coopérative de l'Enseignement Laïc, 1975.
- 『モリエール全集』全4巻、鈴木力衛訳編、中央公論社、1974年。
- ジョルジュ・プーレ『人間的時間の研究』（筑摩叢書 135）、筑摩書房、1973年。
- 『プチ・ロワイヤル仏和辞典 第4版』旺文社、2010年。
- 日比野雅彦「Molière 劇における servante について」（『日本フランス語フランス文学会中部支部 研究報告集 No. 4』、1980年3月）。

映像資料

アリアヌ・ムヌーシュキン『モリエール』全2巻（VHS）、東宝ビデオ（TH1855）。

日比野雅彦 人間環境大学教授（フランス文学）

8 この問題に関しては拙著「Molière 劇における servante について」を参照。